

# 海辺のまちの胎動と息吹き

## 陸前高田く大船渡



静謐な白亜の建築物から  
祈りと活気が広がる

岩手県、宮城県の県境に広がる  
広田湾。この穏やかな海を抱く岩手  
県陸前高田市を訪ねた。かつて七万  
本もの松の木が繁茂していた高田  
松原の白砂青松は、東日本大震災の  
津波で全域にわたって流出した。唯  
一津波に耐えた奇跡の一本松の姿

は記憶に深く刻まれている。

現在、モニュメントとなったその  
松の木の周辺には高田松原津波復  
興祈念公園が整備されている。陸側  
から向かうと清々しい白色の建物  
が迎えてくれる。二〇一九年九月に  
オープンした「東日本大震災津波伝  
承館」だ。「いわてTSUNAMIメモ  
リアル」の愛称で、東日本大震災  
津波の事実と教訓を後世に伝える  
学習拠点となっている。

設計を手掛けた建築家の内藤廣  
氏は昨秋、日建連建築セミナーにお  
いて、この施設のコンセプトをこう  
説明した。「震災を忘れない人と忘  
れたくない人がいる。エリア全体を  
優しく包み込むランドスケープで、  
美しい広田湾を望み、祈りを捧げる  
精神性を求めた。一〇〇年後にも  
震災を思い出しもらいたい」。芝  
生を敷き詰めた公園やホワイトコン  
クリートに岩手県産のカラマツなど  
自然の手触りをふんだんに取り入  
れた建物を周遊すると、凜とした静  
謐さと解放感に満ちた優しさに包  
まれる。

伝承館の後背地にあたる高田地  
区では、高台に県立病院や小学校が



東日本大震災津波伝承館「いわてTSUNAMI メモリアル」(建物右側。左側は隣接する道の駅「高田松原」)

「命を守り、海と大地と共に生きる」をテーマに掲げ、整備された。津波を正しく恐れ、悲劇を繰り返さないために、三陸を襲った津波の歴史や発生メカニズムなどに加え、東日本大震災津波で被災した実物資料や被災者の証言など約150点を公開している。



高台には商業施設や公共施設を集約しコンパクトなまちを目指す。

整備された。更に高上げされたエリ  
アではBRT(バス高速輸送システ  
ム)の陸前高田駅を中心として飲食  
店や商業施設に加え、図書館、文化  
会館、博物館などの公共施設の集  
約が進む。海辺の祈りが陸に向かっ  
て沁み出すように、まちは活気を取  
り戻しつつある。

ばあちゃんパワーで乗り越える

活気や元気があふれる「村」があ  
ると聞いて広田町長洞地区へ向かっ  
た。「長洞元気村」は海産物の直送  
便や民泊、ボランティアツアーなど  
を展開する一般社団法人だ。同地



1月中旬の高田松原津波復興祈念公園は人影がまばらだったが、湾を望む高さ12.5mの防潮堤に設けられた献花台には白い小さな花束の花弁が揺れていた。その先の湾に沿って松林と1.2kmの砂浜の再生が始まっている。



館内は「歴史をひもとく」「復興を共に進める」などテーマごとに4つのゾーンに分かれている。「事実を知る」ゾーンには津波で被災した消防車や橋梁の一部などが展示され、津波の威力を伝えている。





上／食事ができるフードホールを中心に、発酵をテーマにしたテナントが並ぶ店内。「アトリエ」と名付けられたテストキッチンも備え、新しい発酵の可能性を探るイベントなども企画、プロデュースする。

右／昼食時、夕方の買い物時に地元の人が次々と訪れる。これからは市外、県外からの集客も目指したい。

### 陸前高田の活力を醸す「CAMOCY」

地元の若い農家が水耕栽培で育てたイチゴをテーマにしたイチゴフェアが開催されていた。各店舗がイチゴを使ったスイーツやパンを提供、その美味しさを競う。「コンセプトの『発酵』はちょっと抽象的なイメージがありますよね。だからこそテーマを設定して各店舗のこだわりや想いを、食べ物やカタチにする楽しさがあります」と、株式会社八木澤商店CAMOCY店の阿部史恵店長（右下の写真）は話す。「次のテーマは？」と聞くと「内緒です」と言って悪戯っぽく笑った。



### 隣町 大船渡も元気です。



隣町の大船渡は盛（さかり）から陸前高田を経由して気仙沼までを結ぶBRTの起点。盛駅はBRTと三陸鉄道を接続するターミナルだ。このまちも市街の中心地に鮮魚や雑貨を扱う店舗や飲食店が軒を連ねる。商店街や宿泊施設が整備され活気を取り戻しつつある。大船渡漁港も新鮮な魚介類の水揚げで賑わっていた。



2021

上／総延長2kmに及ぶ防潮堤の後背地には津波伝承館や野球場などを備えた運動公園が整備された。利便性と津波対策を見据え、主要幹線道路と補助幹線道路を格子状に配置する道路ネットワークが構築された。

右／新たな土地を造成する大工事は、ほぼ24時間体制で展開された。当時のプロジェクトマネージャー（清水建設㈱）の「ベルトコンベアは見たこともないウルトラCの土木技術。それ以前に、工期短縮のため手戻りが絶対に許されない、業界の威信をかけた現場です」という言葉に意気込みがみなぎっていた。（本誌2015年3月号より）



2015

業界の威信をかけ、取組んでいます。

「瓦礫の片付けに建設会社のボランティアの方々と現場に立った時、私たち被災者の手には金槌ひとつ無かった。道具を借りて作業をしましたが、その道具をそのまま残していってくれました。仮設住宅撤去の際にも余材をウッドデッキに使いたいとお願いすると、回収せずに提供して下さった。会社に戻って紛失の始末書を書いたかもしれませんが、被災の現実と現場を知っている建設会社の皆さんの心遣いや温かい対応は忘れません」(一般社団法人長洞元気村 村上誠二事務局長／左上の写真の左端)



う。値段に頓着しない大らかさだ。しかし、このコロナ禍で村を訪れる人は激減した。「再び大きな試練をいただいた。でも震災から一〇年が経ち、もはや私たちは被災者ではありません。ばあちゃんパワーで乗り越えていきます」と村上事務局長は意欲を見せる。地域がまとまって仮設住宅へ、そして再び高台移転し、かつての地域の絆は更に強固になったようにも感じられた。長洞の地域限定とはいえ震災前を超える再興「創造的復興」の理想形があった。

#### 活力が発酵、拡散する拠点

昨年暮れ、湾岸近くの今泉地区にユニークな施設がオープンした。「発酵」をテーマにした店舗が集う商業施設「CAMOCY」だ。発酵定食、パン、チョコレート、クラフトビールなど、発酵無くしては作れないものを「おいしく、楽しく」提供している。発酵食堂「やぎさわ」の阿部史恵店長がこう説明してくれた。「全国からコンセプトに共感してくださる方々の協力があった。ようやく実現した施設です。土地の造

### 「好齢者パワー」あふれる長洞元気村

「瓦礫の片付けに建設会社のボランティアの方々と現場に立った時、私たち被災者の手には金槌ひとつ無かった。道具を借りて作業をしましたが、その道具をそのまま残していってくれました。仮設住宅撤去の際にも余材をウッドデッキに使いたいとお願いすると、回収せずに提供して下さった。会社に戻って紛失の始末書を書いたかもしれませんが、被災の現実と現場を知っている建設会社の皆さんの心遣いや温かい対応は忘れません」(一般社団法人長洞元気村 村上誠二事務局長／左上の写真の左端)

区では集落六〇世帯のうち二八戸が津波で流された。家屋を失った住民はこれまでのコミュニティを維持するため、集落内での仮設住宅の建設を模索。地権者や市、県との交渉を経て仮設住宅団地「長洞元気村」を立ち上げた。「当時からばあちゃんたちが中心になって始めた、ボランティアの皆さんへの食事の提供が元気村の起点です。今ではそうした活動が『事業』として成立し、ばあちゃんたちの生きがいになっています」と話すのは村上誠二事務局長だ。仮設に暮らす住民がまとまって高台に移転した後も法人化して事業を継続、仮設住宅時代の結束を丸ごと維持しながら活動している。活動の「中核」なでしこ会」の構成メンバーは村のばあちゃんたち。高齢者ではなく「好齢者」を自称する。ばあちゃんたちにやりがいを与える「みんなで集まって直送便の海産物を加工したり、発送したり。でも一番楽しいのはお茶っこ飲むこと」と朗らかに笑う。土産にサバの味噌煮を所望すると「これ、いくらだったかな」と、賑やかに確かめ合

